



直売所と地域経済の発展

大分県・大分東明高等学校 2年 徳丸 実玖

日本の人口が減少している。私は、この記事を見て衝撃的だった。少子化や高齢化が至る所で議論され、私たちのような将来を担う若者にどのような日本の未来が待っているのだろうか。

先日、母と買い物に出かけた。夕食のおかずや私のお弁当に入れるフルーツ、日用雑貨などでカートは一杯になった。私はこれらの食料品が数日で私たち家族に食され、消費されることにびっくりした。夕食には、今日買った新鮮な魚やお野菜が並んでいる。スーパーではそれぞれがバラバラに並んでいたのに、母の手にかかると見事に変身して料理となる。私が食する料理は、生産者が大切に育てた素材と母の愛情がこもった調理が融合して、食べることの喜びを感じることができる。

素材は一体どうやってスーパーに並ぶのだろうか。母が買った野菜は、スーパーの中にある直売所のものだった。私は野菜コーナーにある野菜と直売所にある野菜の違いを母に尋ねた。すると、野菜の流通や栽培した人が全く違うことを教えてくれた。スーパーの野菜では、日本全国各地で育てられた野菜が市場や流通業者の手によってはるばる私の住んでいる街へやってくるのだと言う。一方、直売所は近隣の農村で育った野菜がその日のうちに届くのだ。ではなぜ母は野菜コーナーではなく直売所を選んだのだろうか。

その答えは、私たち若者にとってとても重要なことだった。野菜コーナーに届く野菜はどこの誰が栽培したのか分からない。さらに、私たち消費者にとって選択肢がない。北海道のジャガイモだけでなく、長崎県のジャガイモを食べたいというニーズに合致できない。さらに、スーパーによっては国産の安全な野菜を選ぶことすらできないのだ。

直売所の野菜を選ぶ時、母は必ず商品のラベルを興味深く見る。なぜなら、そこには生産者名などが書いてあるからだ。これまでの購入経験を基に誰の野

菜を選ぶべきか知っているのだ。この野菜はこの生産者がいい、という具合に商品の旬と生産者名が購入する基準となっていた。私たち消費者が、毎日口にするものは、そうやって選ばれているのだ。いわゆる消費者ニーズなのだと思います。

では、全ての面において直売所の野菜が優れているのだろうか。私の期待に反してその答えは「NO」だった。

直売所の野菜は、旬のものを中心に品ぞろえしているため旬の時期以外は手に入ることはないのだと言う。夏でも鍋料理には白菜は必須であるし、冬でもトマトはサラダになくはならない素材なのだ。このように消費者にとってのニーズは「安全で新鮮なもの」と「年中いつでも」というとてもわがままな二面性があることも知った。

また、母が直売所の野菜を選ぶ理由がもう一つあった。それは、地域社会の経済循環であった。私の父の先祖が眠っているお墓は、私の街から車で1時間ほどの山間部にある。そこは、数軒の家と小さな田んぼが川沿いに並んでいる小さな集落である。父の話によると、昔はまだ住民も多く、集落のシンボルである神社で祭事があったり、餅つきがあったりと集落の集いがあったという。今では、空家が多くなり、朽ちた家や雑草に覆われた田んぼが散見される。きっと社会の変化によって収入を得るために集落を離れたのだろう。

私は、野菜を栽培することが集落の収入源として存在していることに気付かされた。昔は、集落で栽培される野菜やお米、果物は、八百屋などで換金されることによって集落に収入をもたらし、そこで生計する住民にとっての生業なりわいとなっていたのだ。

では、現在の集落の収入源はどのようになっているのだろうか。私たちの周辺には、大型ショッピングモールが乱立し、多種多様な食材が所狭しと並んでいる。国産だけでなく、はるばる外国のものまでもが同じように並んでいる。私たち消費者の購買行動の変化が集落の収入源を断ち、集落の活気を奪っているのかもしれない。

母は、そのようなことも知った上で直売所の野菜を選んでいたのでという。私たち消費者ができることは地元に還元していくことなのかもしれない。また、そのような現実を知って商品を買うことも重要だと気付いた。

日々、私たちが生きていくために口にする料理は身近な生産者の生活の糧となっており、時として遠くから、また、はるばる海を越えて世界中の生産者の収入源となっている。中でも地域密着型の店舗である直売所は、私たちのすぐそばにある山や川を守っているのかもしれない。母が何気なくカゴに入れていたことは、実はとても意味深いものであった。

私たちが、この美しい自然を次の世代に残していくためには、そこで生活する人々を応援し生活の糧を守り続けることだ。そのためにも、常日頃から何処で誰がどうやって作ったものかを知ったうえで選ぶことが大切だと思う。私たちは、食材だけでなく、衣料品、雑貨、装飾品など多くの商品に囲まれている。その中から「選ぶ」ことが社会経済を支えており、生産者や製造者の生活を支えている。

高齢化による集落の崩壊や人口減少論などの新聞報道が絶えない。しかし、私たちがすべきことは、地域を守り環境を守るために「選ぶ」ことだと思う。

最後に、これから私たちが大人になって家庭を持つ頃にはどのような社会が待っているのだろうか。それまで集落が存続するのだろうか。野菜やお米、果物を栽培し続けることができるのだろうか。そんなことを考え私が社会経済の一員であることの責任の重さを感じた。

